

表記体系をめぐる紛争：文字紛争論序説

松尾雅嗣

広島大学平和科学研究センター

Conflicts over the Writing System: Toward a Theory of Script Conflict

Masatsugu MATSUO

Institute for Peace Science, Hiroshima University

Summary

The present paper is an attempt to explore the causes and circumstances of conflicts over the writing system, or script conflicts, on the basis of the examination of a variety of cases. First of all, the creation or change of the writing system is often closely linked with the interests and identity of a group. The writing system, whether it is newly created or changed or maintained, can influence the life chances of a group. Or it may satisfy or disappoint the identity need of the group. Secondly, the modern industrial society requires universal or semi-universal literacy. The writing system is a prerequisite for this. Thirdly, the relationship between a language and its writing system is not a necessary one, but a conventional or arbitrary one. This means that there is always room for the choice of a writing system among possible candidates. This nature of the writing system also provides a possibility of conflict over the choice.

はじめに

近代言語学の祖と言われるソシュール (Ferdinand de Saussure) 以来の構造主義言語学は、言語の研究に際して、文字と音声を比較した場合、決定的に音声を重視してきた。文字による表記は、便宜的な二義的なものに過ぎないとされた。例えば、ブルームフィールド (Leonard Bloomfield) の著書はアメリカ構造主義言語学の古典とされるが、そこでは「文字は言語ではない、単に目に見える形でそれを記録する手段に過ぎない」とさえ断定されている (Bloomfield: 1969, 21)。しかし、言語学理論という観点を離れて、社会における言語という観点からすれば、表記体系 (writing system)、文字、正書法といった言語の視覚的表記に関わる問題を無視することはできない。重要な紛争要因になりうるからである。多くの論者が指摘するように、文字の問題は、科学的あるいは技術的に中立的な営為ではありえない。価値の問題に深く根差した営為である (Calvet 1998: 153, Schieffelin and Doucet 1998: 285)。

本稿は、文字の問題が、広い意味での集団の利害(あるいは権力)とアイデンティティに如何に密接に関わるかを明らかにし、今後の研究の前提として大まかな理論的見取図を与えることにある。文字、より正確に言えば文字を含む言語表記のシステム、に関しては、実はふたつの大きな問題がある。ひとつは、表記体系そのものの問題であり、他のひとつは、表記体系の学習と使用に関わる問題、即ち識字能力の問題である。ここでは、文字の取捨、表記法(正書法)を含む広い意味での表記体系の選択の問題に焦点を絞る。識字能力に関わる議論は割愛し、ここで簡単に触れるにとどめる。

識字能力、あるいは読み書きができるという問題は、今日の世界の、とりわけ途上国における、深刻な問題である。また、識字能力の向上が近代化と開発の緊急の課題であることは言うまでもない。しかし、集団の利害とアイデンティティというわれわれの問題関心からすれば、識字能力に関しては、開発に関して論じられるのとは異なる幾つかの側面を指摘することができる。

まず、歴史的には社会の特定の集団が識字能力を独占することによって、不平等な社会体制を維持した事例もある。例えば、奴隷制下におけるアメリカ黒人がその例である。モンゴル人の王朝である元朝は、行政におけるモンゴル文字の使用を強

制する一方で、漢人がそれを学ぶことを禁じた (Thierry 1989: 83)。「文字が、その原初においては、おしなべて特権的支配集団の専有物としてつくられているのであれば、自然との共存のなかに明け暮れするコタンのひとびとに文字はいらぬ。無文字は、いうなれば、民族固有のユートピアを意味している」(山川 1989: 9)というのは、事態の些か誇大な表現であろう。また、「ペンが剣の一種であり、文字が搾取と不平等と抑圧の、カーストと階級の、基底そのものにある」との主張に対して疑義 (Harbsmeier 1989: 199) がないわけでもない。しかし、文字の占有が重要な意義をもつ場合も少なくないことは否定できない。

現代においても、同様の問題を指摘できる。例えば、北アフリカのベルベル人の場合、1990年の「アラビア語法案」に見られるごときアルジェリア政府の強硬なアラビア語化政策は言うまでもないとしても(福田 1991: 70-71)、固有の文字をもたぬことが、自らの言語を失いアラビア語化される一因とされる(宮治 1978: 8-9)。文字をもたぬ民族やエスニック集団によって、後述のように独自の言語を表現する文字ないしは表記体系を確立する様々な試みが行われるのはこの故である。

実は、問題はこれほど単純ではない。当該言語が多言語社会における少数言語あるいは非支配的言語であるとき、問題は複雑になる。支配的集団は、支配的表記体系の採用を要求あるいは強要するであろうし、非支配的集団は自己の表記体系の維持を主張するであろう。クルマス (Florian Coulmas 1984: 2) の指摘するように、非支配的集団は、支配的集団の支配的表記体系を強制されるという意味で二重に不利な立場に陥りかねない。これは、非支配的集団が、文字をもたない場合も同様である。

いずれにせよ、識字能力の問題は、多くの場合表記体系の問題と密接な関わりを有するが、本稿では割愛する。

1 前提

1. 1 表記体系の暫定的定義

これまで表記体系 (writing system) という用語を用いてきたが、文字を含む表記体系に関しては、多くの研究者が多様な用語を多様な意味で使用し、用語と概念に相当の混乱が見られるので、本論に入る前にここで概念と用語の若干の整理を試

みる。この整理の目的は、集団の利害とアイデンティティに関わり、それゆえに潜在的紛争要因になりうる言語の文字表記に関わる要素を予め抽出しておくことである。

一般に、表記体系は、ふたつの要素からなると考えられる。ひとつは、文字の集合であり、他のひとつは、文字の組み合わせ方の規則、所謂正書法である。ひとつの言語には、ひとつの表記体系が対応するのが通例であるが、後述のように、ひとつの言語に二つ以上の表記体系が使用される場合、デイル (Ian Dale 1980: 5, 6) の用語を借りれば、「表記体系併用 (digraphia)」という現象も多く観察される。逆に、ラテン文字体系やキリル文字体系のように、ひとつの表記体系 (多くの場合、厳密には、後述の文字体系) が二つ以上の言語の表記に用いられることもある。

任意の表記体系に含まれる文字の集合を文字体系 (alphabet あるいはscript) と呼ぶことにする。文字体系に含まれる文字は、原則として特定の発音に対応するか、特定の概念に対応するが、その複数個の組み合わせが特定の音や概念に対応することも少なくない。ここで言う文字には、声調や音調や母音の長さを示す付加記号や、俗に言う合せ文字、二重字も含むものとする。

任意の文字体系には、社会的機能を異にする複数の書体に対応する事例もある。漢字における楷書と草書の違いも同様である。「書体併用」は、「同一表記体系のもとで、個々の文字に関して複数の書体システムが存在すること」と定義できよう。

しかしながら、書体併用と表記体系併用の区別は必ずしも自明ではない。デイルが紹介する古代エジプトにおける事例によれば、象形文字は、碑文や他の高度に公式的なあるいは儀式的な性格の文書に使用され、神官書体は文学と宗教の文書の記録に使用され、民衆文字 (民用文字、デモティック) は他の日常生活の目的に使用された。この三つの表記体系は、何世紀にも渡って併用された。しかし、この三者はシステムとしては、同一であり、記号の形だけが異なるものである (Dale 1980: 7)。だからといって、古代エジプトのこの事例を、単純に書体併用の事例と決め付けることにも慎重にならざるをえない。同じ文字の別個の表記法としてではなく、三つの書体のそれぞれが別の文字体系と認識されていた可能性も大であるからである。

類似の例は、セルビア語とクロアチア語に見ることができる。このふたつの言語

が同一の言語であるとする、周知の如く、キリル文字とラテン文字というふたつの文字体系が併用されていることになる。ところが、少なくとも旧ユーゴスラビアにおけるクロアチア語とセルビア語に関する限りでは、キリル文字表記とラテン文字表記は厳密に対応し、翻字は機械的に可能であった。キリル文字で印刷する場合でも、ラテン文字でタイプした原稿を提出することができた (Corbett 1990: 128)。これは、書体の併用であろうか、それとも表記体系の併用であろうか。

所与の文字体系を使って、音、音節、音の連鎖、文節、概念、複合的概念などを表現するための規則が正書法である。現代においては何らかの形で明示的に規定されることが多い。英語の綴り字の単純化の試み (Coulmas 1989: 250-254)、日本における歴史的仮名遣いから現代仮名遣いへの変更、送り仮名規則の改定などが、正書法に関わる問題である。

1. 2 表記体系の選択と当事者

以上略述した表記体系の全体もしくは一部が問題となるのは、フィッシュマン (Joshua A. Fishman 1988: 1643) によれば、次の三つのケースがある。

- 1) 表記体系の創造：これまで書かれたことのない言語に対して新たな表記体系を創造すること。
- 2) 表記体系の置換：現行の表記体系を他の表記体系により置換。
- 3) 表記体系の部分的修正、改革。

このいずれの場合についても、何らかの形での選択が問題となる。そして、後に詳しく検討するように、選択肢が集団の利益やアイデンティティに関わりをもつとき、集団間の紛争の潜在的可能性が生ずる。表記体系の場合も、既に多くの論者が指摘するように (Dua 1996: 2, Haarmann 1990: 4, 8, Kawano and Matsuo 2000: 14-15)、言語選択 (この場合は表記体系の全体あるいは部分の選択) が紛争の重要な一要因となる。このような表記体系に関わる紛争を、以下単に文字紛争と呼ぶことにする。

以下本稿では、様々な事例を検討して表記体系の全体あるいは部分が集団の利害

とアイデンティティに如何に関わるか、そしてそれゆえに紛争要因たりうるかを明らかにすることを目的とする。言うまでもなく、あらゆる顕在的潜在的文字紛争を網羅することは不可能である。しかも、個別の事例を詳細に論ずることも紙幅の制約上不可能である。従って、導かれる結論も一定の偏りを免れないことを予め断っておく。

われわれの定義に従えば、文字紛争は、表記体系の全体あるいは一部の選択をめぐる紛争である。極端な場合、僅か1文字が争点となることすらある。以下の事例においては、便宜的に表記体系の全体に関わる紛争とその一部分に関わる紛争に分けて論じることとする。また、紛争の当事者に関しては、一般に言語集団、言語の差異によって他集団と区別される集団、¹⁾と規定しておく。利害とアイデンティティという観点からするとき、当事者である言語集団の属性としては、当該国家あるいは社会において支配的集団であるか、非支配的集団であるかが最も重要な説明変数であると仮定する。これは、言語紛争に関しても基本的には妥当する。しかし、文字紛争の場合、二つの点で若干拡張する必要がある。

ひとつは、支配的言語集団というよりむしろ国家が当事者として重視されるべき場合が少なくないということである。言語紛争や民族紛争においても、支配的集団が国家という制度を利用することは少なくない。この意味で紛争は、往々にして国家対非支配的集団という外見を纏う。文字紛争の場合、勿論程度の差ではあるが、国家対非支配的集団という意味合いが更に強くなる傾向がある。これは、近代社会の性格と表記体系そのもののもつ特性とによると考えられる。この点については後に論ずる。

他のひとつは、文字紛争の場合、当事者が非支配的集団内部の下位集団である事例、換言すれば非支配的集団内部の紛争、が比較的多く見られることである。非支配的集団の内部における、どのような表記体系の選択、変更が集団全体の利害とアイデンティティを最もよく表現しうるか、集団内部の下位集団の利害とアイデンティティを最もよく表現しうるか、をめぐる紛争がそれである。

2 表記体系全体をめぐる紛争

文字紛争は、上で紹介したフィッシュマンに倣い、便宜的に表記体系全体をめぐる

紛争と、表記体系の一部分をめぐる紛争に分けることができよう。ここではまず前者を取り上げる。表記体系全体をめぐる紛争は、文字のない言語に新たな表記体系を導入する場合にも、既存の表記体系を新たな表記体系で置換する場合にも生ずる。圧倒的に多いのは後者である。さらに、上述の文字紛争の当事者の特性に鑑みて、国家対非支配的集団の紛争と集団内部の紛争とに分けて論ずる。言うまでもなく、この区別も便宜的なものである。

2. 1 国家対非支配的集団

従属的言語集団に対する支配的言語集団、特に国家による表記体系の強制は多くの事例があるが、両者の力関係によっては、必ずしも紛争に発展しないことは容易に想像されよう。例えば、中央アジアには中国から移住したドンガン（東干, Dungan）と呼ばれる中国人ムスリムが3万人弱居住しているが、中国語の西北方言である彼らの言語ドンガン語（東干語, Dungan, Dunganese）は、古くは、最初アラビア文字で、十月革命後ラテン文字で、他のムスリム諸民族と同様最終的にはキリル文字で表記された（Wexler 1989: 151）。中国語であるにもかかわらずである。

国家による表記体系の強制には実際には多様な形態がある。一例を挙げれば、帝政ロシアは、ウクライナの民族主義運動の根絶を目的として、1876年にエムス法によりウクライナ語の使用を禁止した（中井 1988: 35, Solchanyk 1985: 60-61）。唯一の例外は、ウクライナの歴史的文献の出版であったが、これには、ウクライナ語ではなくロシア語の正書法に従うという条件が課されていた（中井 1991: 246）。同様に、ロシア領であったリトアニアでは、リトアニア語による出版は、1904年までキリル文字によって表記したもの以外は禁止されていた（Buck 1916: 56）。以下、具体的事例を幾つか検討しよう。

ガリツィア（Galicia）、即ち今日のウクライナ共和国西部は、ハプスブルク帝国領であったが、19世紀後半以降、帝国はポーランド貴族に支配の実権を委ねた。ガリツィア東部の住民の大半は、ウクライナ人農民であった。それゆえ、ウクライナ人の言語と宗教（所謂東方典礼派）は農民の典型として軽蔑された（Isaievych 1994: 38-39）。1859年、時のガリツィア総督ゴルホフスキー伯（Count Agenor Goluchowski）は、ウクライナ語にラテン文字のアルファベットを導入しようとした（中井 1988:

42, Subtelny 1988: 513-514)。ポーランド人によればウクライナ語はポーランド語の「方言」にすぎないから、同様にラテン文字で表記さるべきであった。ウクライナ人はこれに反発し、反対行動を組織してこの提案を撤回させることに成功した。ガリツィアのウクライナ人たちをその政治的沈滞からめざまさせたのが、この「アルファベット戦争」であった(中井 1988: 42)。

東パキスタンの言語であるベンガル語は、1956年憲法により、ウルドゥー語と並んでパキスタンの公用語の地位を与えられたが、この憲法は数ヶ月を経ずして廃止された。しかも、政府は、ベンガル文字を無視してベンガル語にもウルドゥー語と同様ペルシア-アラビア文字を導入しようとした。これが、政府に対するベンガル人の不信を増幅した。この結果、ベンガル文字の簡略化、活字の改革といった本来なら好ましいはずの中央政府による文字改革の努力さえも、ベンガル語に対する中央政府の陰謀と解されることになった。「ベンガル文字の一文字は、ベンガル人一人の命に等しい」というわけである(Musa 1996: 75-76)。このようなベンガル語とベンガル文字に対する政府の態度が、後のバングラデシュ独立の一因になったことは言うまでもない。

1944年、モルドバは、モルダビア共和国としてソ連邦に再併合された。以来、ソ連当局のモルダビア政策の核心は、モルダビア人がルーマニア人でないこと、モルダビアの言語がルーマニア語でないことを内外に喧伝して、ルーマニアとモルダビアの差異を強調する、換言すればモルダビアの独自性を強調することであった。この政策の中心となったのが言語であり、モルダビアのルーマニア語(方言)は、モルダビア語(Moldavian)と命名され、しかも、われわれの当面の関心である文字については、ラテン文字表記からキリル文字表記に変更された(カレル=ダンコース 1981: 306、Eyal 1990: 126-127、Rogers 1981: 235)。ラテン文字を使い続けた文学者は、スラブ起源の言語を「ルーマニア化(Romanise)」することを企んだとして、直ちに処罰された(Eyal 1990: 126-127)。このように、強権と極刑をもってしてまでキリル文字を強制しなければならなかった政策的意図は、後に旧ソ連全体の言語政策、就中文字政策を検討して初めて明らかになるが、その後のモルダビアの状況からも垣間見ることができる。実際、キリル文字の強制は、学校でのルーマニア語教育の衰退と、共和国行政からのルーマニア語の抹殺をもたらした。その結

果、見かけの母語維持率は高いが、ロシア語化が進展した。またこのモルダビア語の衰退は、民族という区分に従った文化的分業と対応する。ロシア人移住者が、大多数の特権的な職業、就中生産と行政において支配的地位を占めているからである (Smith 1989: 229)。このように、キリル文字は、ロシア人とモルダビア人の支配-従属関係の原因でもあり、象徴ともなったのである。

ソ連中央のモルダビア民族政策の核心が言語政策であったことからして、ゴルバチョフ以後のモルダビア民族運動では、言語問題が最大の争点となったのは必然である (Eyal 1990: 131)。モルダビア人の要求は3項目であった。即ち、ルーマニア語を公用語とすること、ラテン文字で表記すること、ルーマニア語とモルダビア語は同一の言語であると認めること (Eyal 1990: 132) であった。ここでも、文字システムが要求の重要な柱であることは注目に値する。結局、共和国政府はラテン文字の使用に同意し、争いは反体制の勝利に終わった (Eyal 1990: 132)。

表記体系の強制の最も大規模な事例は、旧ソ連におけるトルコ系諸民族に対する表記体系の強制であろう。中央アジアから、コーカサス、クリミア半島に至るトルコ系のイスラム教徒諸民族に対して二度に渡って「上からの」表記体系の「改革」が行われた。最初が1920年代末から30年代初頭にかけてのアラビア文字からラテン文字への移行であり、二度目が30年代末のラテン文字からキリル文字への移行である。この二度に渡る表記体系の「改革」は、ソビエト言語政策、ひいては民族政策の核心を成すものであった。そしてそれは、結論的に言えば、モルドバの例に見た如く、党中央ないしはロシア人と諸民族の力関係、具体的には非ロシア諸民族の従属化の過程を、反映してきたと言って過言ではなからう。

1926年にチュルク系諸言語はアラビア文字表記からラテン文字表記に転換する (Lazzerini 1985: 116)。チュルク系言語集団に新たに導入されたラテン文字表記体系は、言語によって若干の相違がある (Fierman 1985: 210)。また、実際の導入の時期は、民族と地域により相当に異なる。

この表記体系の変更を正当化する理由としては、様々な理由が挙げられていた。急速な民衆教育の必要、他民族の経験 (トルコはラテン文字を近代化の手段として使っていた)、クレムリンが諸民族の自立のために推進したコレニザーツィア政策の一環などがそれである (カレールーダンコース 1981: 67, Fierman 1985: 210)。し

かも、ロシア自体においても使用されていなかったラテン文字の採用は、帝国主義的なロシア人支配という色あいを与えないという利点もあった（カレールーダンコース 1981: 67）。

多くの民族において、ラテン文字導入反対派がいなかったわけではない。クリミアのように激しい議論となった事例（Lazzerini 1985: 116-117）もある。また、言語改革と文章語の発展の問題が、革命のはるか以前から論争の焦点であったカザフのように、アラビア文字を使用し続ける権利を求め、一時期それを確保した（Olcott 1985: 191）事例もある。カザフ人は、新しいカザフ語を表記するのに、彼らの話し言葉により密接に対応した文字体系であるアラビア文字がふさわしいとしてアラビア文字を以前から選んでいたからである（Olcott 1985: 189）。あるいは、ウズベク人をはじめとして中央アジア諸民族が、最初ラテン文字の大文字の採用を拒否していたことに見られるように（Fierman 1985: 210）、すべての民族がラテン文字化をすべての面で支持していたわけではない。

クリミアの伝統的なアラビア文字を支持する所謂アラビア派の指導者が、「ブルジョア民族主義」や他の反革命的罪状により非難され、逮捕され、処刑された（Lazzerini 1985: 116-117）ように、強権をもってラテン文字化が強行されたのはなぜであろうか。

ひとつの解答は、ラテン文字化がアラビア文字を理解する宗教的指導者と古い知識人の影響を減少させるものと期待された（Fierman 1985: 210）ことである。しかしながら、1920年代末のラテン文字化の意義は、ラテン文字化以降の中央政府の政策、特に1930年代末のラテン文字からキリル文字への移行に最も明白に見ることができる。なぜなら、ラテン文字化は、スターリンの政策への、即ち後述のキリル文字化とロシア（語）化への、大きな転換と結びついた政治的行為であった（Lazzerini 1985: 116）からである。

1938年には、ラテン文字はキリル文字（Cyrillic）に置換されこととなった（Lazzerini 1985: 117）。これは、諸言語を、少なくとも表記体系によって、ロシア語に近づけようという意志を強調したものであり、文化的なロシア化、ロシア語化の総過程が開始されたことを示唆するものであった（カレールーダンコース 1981: 66-67）。

勿論、キリル文字への移行に先立つ前兆も幾つかある。例えば、ウズベキスタン

では1933年にはウズベク語の綴りを決定する原理としてのチュルク系言語の特徴である母音調和が廃止され、1939年にはラテン文字の順序が、できる限りロシア文字の順序に対応するよう変更された (Fierman 1985: 215-216)。

キリル文字化は、ロシア語と民族言語の二言語使用を促進するものであった。第一に、キリル文字化によりロシア語との表記体系の相違という重大な障害が除去された。第二にキリル文字の使用により、ロシア語から借用された技術用語が各言語に大量に浸透した。1940年代には、この過程が、ロシア語から最も遠い言語をさえ、内部から急激に変革しているように思われた (カレールーダグコース 1981: 295, Olcott 1985: 195-196)。そしてこの二言語使用は、最終的なロシア語化に至ることを意図するものであったと言える。例えば、カザフではキリル文字の使用と二言語使用は、第二次世界大戦時にあっては、国民の動員に意味をもった。事実、愛国的なカザフ兵士を養成するために必要な語彙が、ロシア語からカザフ語に徹底して導入された (Olcott 1985: 195-196)。

このようなロシア化優先、ロシア語優位の兆候は他にも多い。例えば、1940年のウズベク語の文字体系にはロシア語に存在しないウズベク語の音声を現わすための幾つかの文字素が含まれているのは事実である。しかし、選ばれた記号はロシア文字の変形であり、ほぼ完全なロシア文字のリストの最後に付け加えられた (Fierman 1985: 216-217)。実際、スターリン以後の時代ですら正書法において政治的配慮が優先される。“Hamlet”, “hegemon”, “hectare” などの単語の最初の文字については、ウズベク語にはこの音を現わす文字は既に存在し、上記の単語はこの文字を使って頻繁に印刷物に現われているにもかかわらず、これらの「民際」語の正しい綴りは、ロシア語のそれ、つまり、Gamlet, gegemon, gektar のままである (Fierman 1985: 224)。

2. 2 非支配的集団内部の紛争

アルバニア語の表記体系の選択は、宗教的に分断され、しかも強大な列強による分割の危機に直面したアルバニア民族の存在と統一の証明の試みであった (Trix 1997: 10-11)。アルバニア人の試みに対し、周囲の列強は当然の事ながら干渉することを憚らなかつた。表記体系の選択は、優れて政治的メッセージであったからで

ある。1898年にソフィアで印刷されたパンフレットは次のように言う、「アルバニア語を書くことができ、読むことができ、しかも印刷することができ、アルバニア語で教えることができることが明らかになった時には、アルバニアは敵の爪から逃れることができる」(Trix 1997: 7-8) と。

20世紀初頭、アルバニア語には3つの表記体系が存在し、それぞれが宗教と密接に結びついていた。ローマ字は、ローマ・カトリックによって使用された。アルバニア人の約10%が、カトリックであった。他方で、正教徒アルバニア人のイスラム教への改宗に対抗するため、アルバニア語がギリシア文字で書かれるようになっていた。アルバニア人の約20%がギリシア正教徒であった。アラビア文字は、アルバニアを支配するオスマン帝国の文字であり、イスラム教の文字であった。当時、アルバニア人の7割がイスラム教徒であった (Trix 1997: 3-4)。

19世紀から20世紀のアルバニア・ナショナリズムにとって単一の文字体系と正書法が如何に重要であったかを理解するためには、アルバニア人が上述のように宗教的に三分されており、しかもそれぞれに異なる文字体系と結びついていたことが決定的な意味をもつ。宗教的に分断されたアルバニア人にとって、共通の言語であるアルバニア語のしかも共通の書き言葉は、アルバニア人の独自の存在と統一の目に見える象徴として機能するはずであった。19世紀にローマ字を基礎とした正書法を含め、アルバニア語の多様な表記体系が考案され、提案されたのもこのような背景から理解すべきである。実際、正書法の提案の氾濫は、「哀れアルバニアは、AからZにまで分断される」と言われるほどであったが、そのすべてが、アルバニア人がひとつの民族であることを示すことを目的としていたとされる。このような事態を背景として、1908年アルバニア語の表記体系統一のための会議が開催された。この会議の主たる目的は、上述の理由からして、民族の生存であった (Trix 1997: 4-5)。

アルバニア語の表記体系のもつ政治的な意義は、このような文字体系の考案に対する周囲の大国の迅速な反応から見て取ることができる。オスマン帝国もギリシア正教会も、これら文字体系のもつ、アルバニア人が独立の存在であるという、政治的メッセージを理解し、それゆえに妨害した。スタンブール文字が最初に印刷された年、スルタンはアルバニア語のイスタンブールでの印刷を非合法化した。南部アルバニアにアルバニア語の正書法を教える学校が設立されると、ギリシア正教会は、

アルバニア文字を異端としてアルバニア語を学び続ける学生を破門した。1902年、スルタンはアルバニア語の書物をもつことだけでなく、アルバニア語で通信を行うことすら非合法化した (Trix 1997: 7)。

この会議は、アラビア文字、ギリシア文字、ローマ字という文字体系の選択に関しては、特に議論せずローマ字の妥当性を宣言した (Trix 1997: 10) が、問題はローマ字についても3つの主要な正書法があった (Trix 1997: 2) ことである。しかも、このそれぞれが宗教と、そしてまた地域あるいは方言と結びついていた。

この会議の過程で、ふたつの派による対立が浮かび上がってきた。スタンブール文字派とバシュケミ文字派である。この対立は、宗教と方言にに対応するとされる。ムスリムは前者を支持し、正教徒にカトリック教徒を加えたキリスト教徒は後者を支持した (Trix 1997: 11)。この対立は、トスクとゲグという方言の対立、その前提となる都市化した南部と農村地域である北部の地域的対立でもあったとされる (Trix 1997: 10)。因みに方言の対立は、共産主義政権下でトスク方言を標準アルバニア語の基礎とすることにより一応の解決を見る。しかしこの解決も、当時の共産党指導者の大半が、南部出身のトスク方言話者であったという政治的要因によるところが大であるとされる (Byron 1976: 59-61)。

しかしながら、正書法をめぐる対立を宗教と方言の差異に由来すると見るのは一面的にすぎる。第一に、文化的に正教徒に近いと思われるギリシア文字を含むスタンブール文字を支持したのは、ムスリムであった。第二に、スタンブール文字はトスク方言の表記に便利であり、バシュケミはゲグの表記に便利であるが、バシュケミ支持者のうちの半分は、トスク地域出身者であった (Trix 1997: 15-16)。

両派の対立は、どのような言語と言語環境を引照基準としたか、別の言い方をすれば「文字環境 (scriptal environment)」とも呼ぶべきものの差異、に求められる (Trix 1997: 16)。この対立の原因は、19世紀アルバニア南部の破綻し停滞した経済によって理解される。キリスト教徒アルバニア人は西欧に移住し、西欧世界との接触を強めた。他方、イスラム教徒アルバニア人は、東方オスマン帝国の首都に職を求めた。キリスト教徒の文字環境は、英米的であり、イスラム教徒の文字環境はオスマン帝国的であった。英米的文字環境は、「妙な記号のない」ものであり、付加記号はなく、二重文字はあっても意識すらされない。これと対照的にオスマン帝国

の文字環境は、多言語、多文字的であった。当時のイスタンブールの主要言語はトルコ語とギリシア語であったが、イタリア人商人はローマ字を、アルメニア人やグルジア人はそれぞれ独自の文字を、セファルディ・ユダヤ人はしばしばヘブライ文字を、使うという多言語、多文字都市であった。イスラム教徒アルバニア人は、この多言語、多文字社会の中で、みずからのアイデンティティの証として、自分達の書き言葉の独自性を求めたのである (Trix 1997: 18-19)。多言語、多文字環境においては、スタンブール文字のような独自の文字体系は、アルバニア人が求め続けてきた、独自の民族である証であった。他方、英米的な文字環境においては、固有の文字体系は評価されない。ここではバシュケミ文字のほうがより適合する (Trix 1997: 21)。

バシュケミ文字は、英語と同様の二重文字と付加記号の少なさと、西欧の印刷機による印刷の容易さからして、英語の文字環境に近い。これに対して、ローマ字とギリシア文字の独自の組み合わせであるスタンブール文字は、イスラム教徒アルバニア人が、オスマン帝国の文化的枠組みを前提として、独立した民族として獲得したいと願う地位の象徴であった (Trix 1997: 19)。

会議は、スタンブールとバシュケミを相互に近づける修正を施した上で、両方の文字体系を推奨するという結論を出した。この両論併記は、対立の深刻さを示すものである。しかしながら、国際的には、会議の成果は、妥協としてではなく、明確にローマ字体系を採用したものと理解された。青年トルコ党は、アラビア文字の採用を支持する別の会議を開催した (Trix 1997: 19-20) ほどである。

後日譚になるが、アルバニア語正書法の問題は、第一世界大戦後まで続く。第一次世界大戦時の諸外国による占領がアルバニア語の正書法に更に影響を与えることになった。ギリシアによる占領は、スタンブール文字の少数のギリシア文字に対する反発を生み出し、この文字体系が廃れる要因となった。バシュケミ文字体系が次第に一般化した¹⁾が、{gh}は{gj}に、{gn}は{nj}に変更された。イタリアに対する反発から、文字体系をより「非イタリア的」にするためであった (Trix 1997: 20-21)。

マケドニア語の表記体系の選択の問題もまた、強国の狭間で生き延びることを迫られた、アルバニア人と同様の民族の苦悩を反映するものである。しかし、マケドニアの場合、アルバニア人と異なり表記体系の確立の前に、まず固有の言語を確立

する必要があった。今日、南スラブの諸言語は、明確に異なる言語に分かたれているかのごとく見えるが、現実には、方言連続体とも言うべき状態にある。実際、マケドニア語 (Macedonian) を含む南スラブ諸方言は、北部ユーゴスラビアから、ギリシア北部とブルガリアの黒海沿岸部に至る単一の連続体を成している。相互に理解不可能として方言の間に境界線を引くことのできる場所はひとつとしてない。そして、このような状況にあつては、言語の定義は、エスニックな帰属意識や宗教的帰属意識、地理的政治的な境界といった、言語外的な基準にもとづいて成される (Friedman 1993: 160)。

マケドニア人は、民族としての存続を図るためには、このような条件の下で、マケドニア語を独立の言語として確立する必要に迫られていた。以下、1944年のユーゴスラビア連邦を構成する一共和国としてマケドニア共和国の独立に至るまでの、マケドニア語確立の苦闘を手短かに振り返ってみよう。この時期マケドニア語の確立は、表記体系の確立に優先した。

ブルガリアとマケドニアのスラブ人は、近代文章語の創造に際してふたつの戦いに直面していた。ひとつは、ギリシア語とギリシア文化を押し付けるギリシア化主義者との戦いであり、他のひとつは、教会スラブ語を現代文章語として確立しようとする古典回帰主義者 (Archaizers) との戦いであった。1840年頃までは、努力の主眼はギリシア人とは異なるスラブ人としての意識を高揚し、土着言語にもとづくスラブの文章語を確立することにあつた。1840年頃までにこのふたつの脅威は消え去ったが、文章語の基礎となる方言の選択に関してあらたな紛争が生じた (Friedman 1993: 159-160)。

ほぼ1840年から1870年にかけての時期、マケドニアのスラブ人はみづからをブルガリア人と呼んでおり、最初は自身の方言をもとにするか、ブルガリアとマケドニアの多くの方言を折衷した文章語を構想していた。しかし、ブルガリア人は、東部ブルガリア方言をもとにした標準語を押し付けることに固執した。ギリシア化の脅威の消滅に伴い、マケドニア方言に対するブルガリア人の攻撃は激しさを増した (Friedman 1993: 160-161)。

1878年ブルガリアが独立を獲得した。独立の正教会組織と、独自の文章語と、国家としての独立を備えたギリシア、セルビア、ブルガリア3国がマケドニアの地を

めぐる領土要求を展開し、自己の正教会と、言語と、そして主権を受け入れさせようとした。マケドニア人の組織的な民族運動の記録はこの時期に始まる。運動の目標のひとつとしてマケドニア語の推進を掲げる出版物や団体が出現した。しかし、その多くがマケドニア語の振興を謳ってはいるが、目的は言語的なものというより、マケドニア民族の独立という政治的なものであった (Friedman 1993: 161-162)。

第二次バルカン戦争後の1913年と、第一次世界大戦後の1919年の二度に渡って、マケドニアはギリシア、セルビア、ブルガリア、アルバニアに分割された。この4カ国すべてが、同化政策を推進した。マケドニア語は禁じられた言語であった。セルビアとブルガリアでは、マケドニア語は公式にはそれぞれの言語の方言であった。ギリシアでは禁止された。アルバニアでは、マケドニア語はいかなる公的な地位ももたなかった。マケドニア語は、私的なレベルで使用されるに過ぎなかった (Friedman 1993: 163-164)。

マケドニア語を公用語とするマケドニア共和国の宣言は、1944年8月に開催されたANSOM (マケドニア民族解放反ファシスト会議) の第一回総会で行われた (Friedman 1993: 164)。ANSOMは言語委員会 (linguistic commission) を任命し、最初の会議が1944年末に開催された。マケドニア語に反対する集団は、「セルビア化」であるとしてこれに反対した。これは、1946年から48年の一時期を除いて、政治体制の如何を問わず、ブルガリアの常套手段であった (Friedman 1993: 165-166)。

1944年のこの会議においてマケドニア語文章語をキリル文字で表記することは、当然視されていた。問題は、セルビア型のキリル文字か、ブルガリア型のキリル文字か、両者の折衷型か、あるいは新たな独自のキリル文字体系を採用するかであった。この委員会は、セルビア、ブルガリア、教会スラブ語、新たな文字を加えた折衷案を結論として提出した (Friedman 1993: 169)。この提案は採用されず、新たに任命された委員会が1945年に提案した案が直ちに承認された (Friedman 1993: 170)。この経緯と理由は定かでない。

マケドニアにおける共産党独裁の終焉と複数政党制の確立は、マケドニア語文章語を再び政治的争点に転化した。マケドニア語文章語の確立がユーゴスラビア共産党の政策であったからである (Friedman 1993: 171)。これはモルドバとちょうど

逆の関係である。

典型的な例が曖昧母音を表わす文字の扱いである。多くのマケドニア語方言はこの音をもつが、標準マケドニア語の基礎となった方言には存在しない。1944年の第1回会議の提案ではこの音を表わす文字は存在しなかった (Friedman 1993: 171)。政治的に厄介なことに、標準セルボクロアチア語とその基礎となった方言には、あいまい母音は存在しないが、標準ブルガリア語とその基礎となった方言には曖昧母音が存在する (Friedman 1993: 1972)。反共産党民族主義者は、あいまい母音を表記する文字の欠如をマケドニア語を「セルビア化する」として非難した。反対陣営は、このような非難を、ブルガリアの公式的立場の宣伝であるとして、「ブルガリア最良、セルビア嫌い」であると応酬した。かくして、曖昧母音の表記ひとつの扱いが民族主義者とその反対者の間の争点と化しているのである (Friedman 1993: 172)。

アルバニアやマケドニアの事例のように表記体系が集団のアイデンティティと密接に関わる事例は他にも少なくない。現在スペインの自治共同体のひとつであるガリシアにおいても、ガリシア語の表記体系をめぐる長い論争がある。この紛争もまた、多くの非支配的集団の事例に漏れず、ガリシアの歴史とガリシアの置かれた地政学的位置に由来する。アルバニアやマケドニア同様ガリシアもスペインとポルトガルの狭間にある。この事実が、表記体系も含めたガリシアの民族主義的運動の核心にある。

12世紀から15世紀まで、現在のガリシアとポルトガルでは、「ガリシア・ポルトガル語」とも言うべき言語が使用されていた。ポルトガルは12世紀に独立の王国となり、以後ポルトガル語は独自の発展を遂げる。他方、ガリシアは15世紀にカスティリアの支配下に入り、エリートのカスティリア語化 (スペイン語化) が進むとともに、ガリシア語は民衆だけの言語となった。ガリシア独自の文化とアイデンティティの意識が高まったのは19世紀に入ってからである (Henderson 1996: 239-240)。

ガリシア主義、即ちガリシアナショナリズムにとって、書き言葉及び話し言葉としてのガリシア語の使用と推進は、重要な一環であった。ガリシア語がガリシア・アイデンティティの主要な要素であるという信条は今日でもなお支配的である。今日においても、ガリシア語は、アイデンティティの基盤としてであれ、内的なガリ

シア・アイデンティティの何か外的な具現化としてであり、ガリシア人を他と区別する特性なのである (Henderson 1996: 247)。

しかし、ガリシア・ナショナリズムの展開の中で大別してふたつの潮流が現れた。再統合主義者と独立主義者である。今日のガリシアにおける正書法をめぐる対立は基本的には、この両者の対立であり、ガリシア人が何であるかというアイデンティティをめぐる対立でもある。独立主義者によれば、ガリシアとポルトガルの政治的分離は、かつてひとつであったガリシア・ポルトガル語の言語的分離をももたらし、ガリシア語とポルトガル語というふたつの異なる言語を生み出した。再統合主義者によれば、カスティリアの支配と影響さえなければガリシアの言語もポルトガルと同じようになっていたはずである。要するに独立主義者はガリシア語をポルトガル語とは異なる独立の言語と見なし、再統合主義者はガリシア語を広い意味でのポルトガル語の一変種、ポルトガルやブラジルやアフリカの一部で使用されるポルトガル語の変種と同等の一変種であると見なす (Henderson 1996: 246)。

再統合主義者の目的は、ガリシア語からカスティリア的要素を除去し、伝統的ガリシア語を復活し、ポルトガル語世界に再統合することである。従って、ガリシア語は、ポルトガル語と同じように表記されるべきである (Henderson 1996: 246)。

1983年の言語正常化法により、ガリシア語は教育のすべてのレベルで公的に認知されている。大学以下のレベルでは、ガリシア語は必須科目である。また、1982年に政府により承認された正書法がすべての学校における義務的な正書法であり、また最も広く使用されているものでもある。しかし、他の正書法を用いている学校もある。公式正書法は基本的にはカスティリア語の正書法であり、ガリシア語がカスティリア語の方言であるかのように見えるとの批判も多い (Henderson 1996: 248-249)。

再統合主義者と独立主義者の主張に従えば、ガリシア人集団の内部で使用される言語は、正書法次第でガリシア語にもポルトガル語にもなる。かくして正書法に関する議論は集団の境界に間する議論となるのである。独立主義者の正書法に従えば、ガリシア人のみを含み、ポルトガルとスペインを『他者』とすることになる。再統合主義者の正書法は、ガリシア人のみならずポルトガルと恐らくは他のポルトガル語世界をも含む集団の境界を打ち立て、スペインを『他者』とすることになる。

再統合主義者は今日の公式の正書法があまりにカスティリア語に近く、最終的にはスペイン語によるガリシア語の同化に至ると信じており、独立主義者の「われわれ」はスペインを含むのだと言う者もある。(Henderson 1996: 250)

この事例のように、大国の狭間にある民族にとっては、表記体系の選択が、自分達が何者であるかというアイデンティティの問題に重要な関わりをもつのである。

また、新たな表記体系の導入は、どの方言を書き言葉の基礎とするかという問題を提起する (Haugen 1972: 251-252)。ここにも方言集団間の利害が対立する可能性が存する。しかし、この点に関しては割愛する。

2. 3 非支配的集団の表記体系確立の努力

非支配的集団の言語の表記体系に関しては、上述のように国家や支配的集団の表記体系の強要に対する抵抗という側面が強い事例も、非支配的集団内部の紛争という側面が強い事例もある。ここでは、これまで検討したふたつの局面よりも、表記体系確立あるいは選択の内的努力が際立つ事例を幾つか検討する。ここで扱う事例に関しても、支配的集団に対する対抗、集団内部の競合、紛争といった要因が多分に作用していることは言うまでもない。

例えば、ソマリアが1960年に独立したとき、ソマリ語のほかに少なくとも3つの広範に用いられる外生言語があった。アラビア語、英語、イタリア語である。しかし、ソマリ語自体には一般に認められる文字体系が存在しなかった (Lewis 1980: 115, Mezei 1989: 213)。ソマリ語は長らくアラビア文字で表記されていたが、1920年頃に、オスマニア (Osmaniya) なる新たな表記体系が考案され、民族主義者に支持されてきた (Goldthorpe 1984: 184, Lewis 1980: 256, note 5, Mezei 1989: 213)。これに関する限り、非支配的集団の表記体系の確立の努力と見なして差し支えない。

このような状況にあって、1960年の独立以前からも、ソマリ語が国語となること、共通の正書法の確立が必要であることには合意があった。部族主義による分裂を緩和するためには、共通の表記体系が不可欠であると見なされていた。ソマリ語の共通の表記体系は、民主的政治参加と、国民統合と、近代化のために必須であった (Mezei 1989: 214)。しかしこれに関しては、独立以前から3つの派があった。ラ

テン文字派と、アラビア文字派と、ソマリ文字派であった。保守的なイスラム教徒は、ラテン文字をキリスト教浸透の手段と見なした。ソマリ文字派は、ラテン文字を植民地主義と民族的従属の象徴と見なした (Mezei 1989: 214)。遊牧民と農民の言語であるソマリ語を近代化しつつある国家の公用語にすることが賢明であるのかという危惧が表明されることもあった (Mezei 1989: 217)。この問題は独立以後に持ち越され、賛否両様のデモが行われ、広範な流血の危険が現実にあった (Mezei 1989: 214)。異なる表記体系は、異なる人々にとって異なる意味をもつ (Mezei 1989: 220) からである。他方、1972年にローマ字による表記体系が確立するまでの間、それぞれの言語を使用するエリートの競合を反映して、書き言葉によるコミュニケーションには、英語とイタリア語が使用されていた (Goldthorpe 1984: 184, Lewis 1980: 170-171)。この点では、集団内部の紛争という色彩が明らかに濃くなる。

この事例の示すように、支配的集団に対する抵抗といい、集団内部の紛争といい、あるいは集団の自立的努力と言っても、分類は多分に便宜的なものであり、すべての事例が大なり小なりどの側面ももつことは言うまでもない。

非支配的集団の表記体系確立の試みとしては、古くはトランシルヴァニアのルーマニア人学者達、所謂アルデア学派のそれを挙げることができよう。彼らは、当時スラブ系の言語と見なされることの多かったルーマニア語が明らかにラテン的であることと西欧の姉妹言語と近縁であることを証明することを第一の動機として (Rogers 1981: 233)、スラヴ系の語彙をロマンス系の語彙に代えて、ルーマニア語の語彙を構築することを試みた。のみならず、彼らはキリル文字をラテン文字に代える最初の本格的な試みも行なった (Mallinson 1990: 295, Rogers 1981: 233)。アルデア学派は、語彙のみならず、表記体系までも、ルーマニア民族の象徴と見なしたのである。そして、彼らの動機は純粋に言語学的な考慮とはまったく独立であった。

以前には30幾つという説もあったが、現在インドにおいては25の文字体系が確認されている。そのうちの主要な11は、主として指定言語を表記するのに使用されている。近年インドにおいては、任意の言語の独自性は、単にそれが母語であることによってだけでなく、表記体系を有するか否かによっても規定される。ある部族の

指導者は「言語は母であり、文字は父である (A language is mother, a script is father)」と言う (Singh and Manoharan 1993: 28)。この背景の一つに、本稿で既に論じた事例と同様多くの少数言語が複数の表記体系に分断されているという事実がある。

例えば、コーンクニー語 (Konkani) がそうである。コーンクニー語は、マラティ語) の方言とされることもあるが、ゴアを中心に約200万人の言語人口を有する (Miranda 1992: 213)。当地におけるコーンクニー語の地位は徐々に高まりつつあるが、地理的、社会的な方言の差異も大きい上に、政治的社会的に安定したものとは言えない (Miranda 1992: 214-216)。コーンクニー語は、ゴアでは宗教の違いによりナガリ文字とローマ字で書かれる。カンナダ (Kannada) 文字で書かれることもある。近年表記体系統一の動きもあるが、結論を得るに至っていない (Miranda 1992: 216-218)。

ジャルカンド運動は、インド・ビハール州南部の指定部族あるいはアーディワージー (Adivasi, 「先住民」の意) と呼ばれる長い伝統をもつ少数集団の自立、自治要求運動である。この運動の中心的役割を果たしているのが、人口500万人のサンタル人である。彼らはまた、隣接のアッサム、西ベンガル、オリッサ諸州にも居住するが、その空間的離散にもかかわらず、固有の言語と文化的アイデンティティを維持している。しかし、彼らは長い口誦の伝統をもつものの、固有の文字をもたなかった。19世紀後半、彼らの言語を文章語化する時、地域ごとに異なる文字が使用された。サンタル語は、最初、ベンガル文字で書かれ、オリッサとビハールでは、それぞれ、一部オリヤ文字とナガリ文字で書かれた。その後、キリスト教宣教師の主導により、ローマ字が採用された (Chaklader 1990: 136-137)。

サンタル語の文字の多様性は、サンタル人の言語の一体性とアイデンティティの危機を招いた。それゆえ、集団の存続のためにも、共通の表記体系が必要となった (Chaklader 1990: 137)。

この間、オルーチキ文字 (Ol Chiki script, Olchiki) と呼ばれるサンタル語の独自の文字が創始された。西ベンガル州政府は、近年サンタル語の文字としてオルーチキ文字を公式に認知し、初等教育での使用を認めた。しかし、他のビハールやオリッサのような州は、まだこれを認めていない。このような試みは、自己のアイデ

ンティティを確立し主張する努力の一環なのである (Chaklader 1990: 137-138, Singh and Manoharan 1993: 29)。

3 単一の文字をめぐる紛争

フィッシュマン (Fishman 1988: 1646) は、現存の表記体系の改変は、社会変動を象徴するというより表記体系内部の問題に直接に関わるものであるとする。これは、一般的には誤りではないが、表記体系の部分的改変が言語集団の利害とアイデンティティに関わる限りにおいて、紛争要因になりうる。フィッシュマンの言うように、表記体系の改変の目的が、単純化であり、しばしば書き言葉を実際の発音に近づけること (Fishman 1988: 1647) であるとしても、既にマケドニア語の曖昧母音の表記について見た如く、それがどのように解釈されるかによって紛争の潜在的可能性は常に存在する。

以下に取り上げるのは、文字どおりひとつの文字をめぐる紛争である。単一の文字ですら言語集団の利害やアイデンティティに関わる問題となりうるからである。

ルーマニア人が、スラブの海の中で自己のアイデンティティを確立するよすがとして、自らの言語であるルーマニア語のラテン性、即ち非スラブ性に依拠してきたことは、アルデア学派の試みに関して既に述べた。戦後の共産主義体制下においても、わずかに文字をめぐる同様の問題が生じた。

ルーマニアでは、1953年に文字の改定が行われた。改定は第一義的には、文字 \hat{a} と \hat{i} に関するものであった。いずれの文字も音声的に同じであり、併用されるので、変更は重要なものではなく見えるかもしれない。しかし、この変更は、ラテン性を減少させるものであった。例えば、 $p\hat{a}ine$ (ラテン語では $panem$) が $p\hat{i}ine$ となるからである。1965年には、ルーマニアは $Rom\hat{a}nia$ という単語そのものとその派生語に関してさえ、 \hat{a} を \hat{i} に置換しはじめた。これに対して、 \hat{a} を復活させる運動が生まれた。運動の指導的作家によれば、「 \hat{a} の文字を否定することは、民族精神を形成し、われわれ独自の民族的性格を保持するというより広い領域においても問題だから誤りなのである。 \hat{a} を捨てることは、単にひとつの文字を捨てるだけではなく、われわれの歴史の一部を捨てることなのである」。しかし、党は断固として如何なる変更も拒否した。反対運動は成功しなかった (Ermatinger 1992: 185)。

ウクライナ語の文字体系には、キリル文字、ロシア文字のГに似たロシア語にはない文字があったが、ソ連の言語政策の一環として1933年に廃止された(Krouglov 1997: 14)。以来、この文字の使用は「民族的偏向」と非難されてきた。しかし、ウクライナでは、ベレストロイカ以後作家達がウクライナ語の復権要求の一つとして、この文字のウクライナ語のアルファベットへの再導入を掲げた(中井 1990: 98)。多くのウクライナ人にとって、旧ソ連時代におけるウクライナ語の抑圧と破壊は、1986年のチェルノブイリ事故に等しいものであり(Krouglov 1997: 16)、この文字の廃止と禁止は、まさにこの象徴であった。従って、ウクライナ独立後の1991年にこの文字が復活され、ソビエト政策に対する勝利と見なされた(Krouglov 1997: 21)のも当然であった。

スペイン語にはエニユ(\tilde{n} , $\tilde{Ñ}$)と呼ばれる文字がある。スペインは、コンピュータのキーボードにこの文字を義務づけていたが、EC加盟後EC規格を優先させエニユをなくすことを決定した。これに対してアイデンティティの問題であるとする文化人を中心とした猛烈な反対論が起こった。技術と費用の面でも問題のない「すべてのキーボードにエニユを付け加えればよい」ということで落ち着いた(朝日新聞 1991年6月3日)。

1文字だけの問題ではないが、旧ソ連において、独自の文字体系の中で文字が廃止された事例は他の言語にも見られる。例えば、ユダヤ人の言語であるイディッシュ語(Yiddish)については、ヘブライ文字が維持されているが、1930年代から1961年までの間に最後の5文字が廃止され、極東にあるユダヤ人の自治州であるビロビジャン自治州のイディッシュ語の出版物においても依然として復活していない(Wexler 1989: 151)。

4 紛争要因としての表記体系

近代言語学の祖と言われるソシュール(Ferdinand de Saussure)は、かつて表記体系に関して「音と文字の間には何ら必然的な関係がない、例えばtの文字とそれが表わす音声の間には何ら必然的な関係はない。音と文字の関係は任意的であるが故に、どのような文字で表記されるかはまず問題にならない」(Saussure 1983: 117-118)と述べた。従って、言語学の立場からは文字は二義的な問題に過ぎない。

しかし、ソシユールの言葉を逆手にとって言えば、表記体系と言語の関係が任意的であるが故に、表記体系は紛争という観点からは重要なのである。両者の関係が必然的であれば、任意の言語は特定の表記体系と一対一に対応し、言語が定めれば表記体系は必然的に一意的に定まる。従って、選択の余地はない。そして、紛争の余地もありえない。支配的言語集団が、非支配的言語集団に自身の表記体系を強制することも不可能であれば、非支配的集団が独自の表記体系を考案することも論理的にありえない。しかし、表記体系と言語の関係が任意的であるが故に、ひとつの言語に複数の表記体系が存在しうるのである。ここに表記体系が紛争の争点となりうる根拠がある。

しかも、表記体系は、単に任意の言語を文字によって表わす記号の体系にとどまらず、あらゆる事物と記号がそうであるように、それ自身が言語以外のものをも表象しうるのである (Schieffelin and Doucet 1998: 307, 註 2)。即ち、国家や民族や宗教の象徴となりうるのである。否、そればかりではない。抑圧や差別という形で個人と集団の利害にも関わるのである。そして、それゆえにこそ紛争の争点となりうるのである。

紛争という観点からは、表記体系と言語の任意的関係に加えて、さらにもうひとつの紛争要因を挙げなければならない。それは、言語そのものの不確定性である。ある言語が、他の言語と異なる独立の言語であることは決して自明ではない。これまでに論じた事例で言えば、アルバニア語もマケドニア語もウクライナ語もガリシア語も、そしてルーマニア語ですらも独自の言語であることを何らかの形で明らかにする努力を必要とした。一般に、言語と方言、任意の言語と他の言語の境界を明確に確定することは不可能である。「言語とは軍隊をもった方言である」という名言が示すように、この判断は、しばしば、厳密に言語学的根拠というより、政治的社会的根拠にもとづいて行なわれてきたのである (Comrie 1990: 2-3)。一方で政治的社会的に定まる言語なるものが存在し、それに対応する複数の (理論的には無限の) 表記体系があるというのが、われわれが念頭におくべき状況なのである。言語と表記体系というこの二重の不確定性は、事が価値や利害と二重に関係することを意味する。そしてそれは二重に紛争の要因となるのである。

このように、言語と表記体系の関係が任意的であり、かつ言語と表記体系がそれ

それに集団の文化や価値や、集団の存在それ自体の象徴となりうることに、表記体系をめぐる紛争の存在論的要因が求められよう。

5 表記体系とアイデンティティ

本稿ではこれまで、表記体系に関する紛争、所謂文字紛争の要因として当事者集団の利害とアイデンティティのふたつを想定してきた。これまで扱った事例から、表記体系（ひいては言語）が集団の（集団内部における）一体性と（集団外部に対する）独自性、一言にして言えば集団のアイデンティティの象徴として機能することは明らかであろう。さらに付け加えるならば、19世紀から20世紀にかけて集団固有の言語のために考案された独自の表記体系は20を超えるとされるが、クーパー（Robert L. Cooper）はその理由のひとつとして集団のアイデンティティの維持を挙げている（Cooper 1991: 220, 222）。

これまで、議論の対象とした表記体系に関しては、問題の時点で、あるいは将来において、当該の表記体系は集団の大多数に共有される（あるいはさるべきである）と暗黙のうちに仮定してきた。ここでひとつだけ補足しておけば、この仮定は、表記体系と集団のアイデンティティの関係を論ずる際、必ずしも必要ではないということである。換言すれば、表記体系が集団のアイデンティティの象徴となるためには集団の大多数がこれを使用する必要はない。当該集団のごく少数にしか使用されない表記体系であったとしても、例えばカムムアン語（北部タイ方言）が使用される地域におけるタム文字や中国におけるルー文字のように、集団のごく一部にしか使用されない表記体系も集団のアイデンティティの象徴となりうる（Keyes 1995: 142）。

表記体系とアイデンティティの結びつきに関しては、これまで論じた例のほかにも、数多くの事例を挙げることができる。例えば、18世紀米国において辞書編纂者として有名なウェブスター（Noah Webster）は英語の綴り字改革を提唱したが、彼の提案の内容は明らかに英国と米国の差異を強調するものであった。例えば、“centre”と“center”，“labour”と“labor”などがそれである。ウェブスターの意図は言うまでもなく、英国と米国の英語の差異、ひいてはアメリカ国民の独自性を強調することにあつた。そして彼の提案が、同時代のフランクリン（Benjamin Franklin）

のはるかに優れた首尾一貫した提案よりも受け入れられた理由のひとつは、このようにアメリカの独自性を前面に出したことであった。ウェブスターのこの提案が、独立直後の1789年に成されたことは偶然ではない (Coulmas 1989: 252-254)。

独自の表記体系が民族や国民の独自性の象徴と見なされる例は、一般化して言えば、国民形成や国民統合あるいは国家を持たない民族の場合には民族の形成と動員の必要に迫られた状況でしばしば見られる。これまでに論じた事例の多くがそうであったと言える。しかし、国民形成、国民統合といった国家の立場からは、これまであまり論じてこなかった。ここでひとつだけ例を挙げておこう。

マンデ語 (Mande, マンディング語, マンディング語など多くの別称あり) は、マリ、ブルキナ・ファソ、セネガル、ギニアなどの西アフリカ諸国で話される言語であり、国ごと、地域後にさまざまな名称で呼ばれ、しかも局地的にはあるが土着の多様な表記体系が併存する。ユネスコは、1966年にマンデ語を含むアフリカの幾つかの言語のそれぞれについて表記体系の統一を提案する会議を開いた。マンデ語についても共通のローマ字体系が提案されたが、どの国も提案の一部分を採用したに過ぎなかった。その結果、同じ単語が国により、“*segin*,” “*seyin*,” “*seegin*” などと異なって表記されることとなった。統一的表記体系の提案が地域の事柄に対する西欧の干渉と見られた側面もあるが、最大の理由は各国がそれぞれの独自性の象徴として独自の表記体系を保有することを願ったことにある。表記体系の差異は国家と国民の差異なのである。従って、同じ言語であっても国境を越えれば異なる表記体系が用いられる一方で、別の言語であっても、別の方言であっても、同一国内では同一の表記体系が用いられることになる。このような個別主義的な政策が如何に笑止であろうとも、この場合国家と国民のアイデンティティが優先するのである (Calvet 1998: 153-155)。「パローキアリズム」の汚名を被らうとも、あるいはコミュニケーションをある程度犠牲にしようとも (Calvet 1998: 163)、他の国家・国民とは異なることの可視的な象徴として表記体系が選択されるのである。

独自の表記体系の選択が、もっぱら国家と国民の独自性を強調する意図の下に行われるのであれば、一定程度の国民形成と国民統合が果たされた後には、独自の表記体系の持つ意義は、消滅しないまでも大幅に減少する。1960年代末から70年代にかけての、インドネシア、マレーシア、シンガポールにおけるマレー語 (それぞれ

の国家においては、インドネシア語、マレーシア語、マレー語)の表記体系の共通化と統一の試みはこの段階の現象である(Calvet 1998: 156)。オランダとベルギーにおけるオランダ語表記の統一の試み、所謂「オランダ語協力」(de Rooji and Verhoeven 1988: 65)も同様に解されるであろう。但し、いずれの場合にもこのような協力が完成する過程において、当該の国家と地域が、それぞれの利害とアイデンティティを容易に脱却できたわけではない。むしろそれが協力の隘路となることもあった。例えば、ベルギー、正確にはオランダ語を使用する北部のフランダースにおいては、フランス語の脅威に対抗するという理由でオランダとの共通の標準語化を主張する勢力、「統合主義派」が優位を占めた(van de Craen and Willemyns 1988: 54-55)にもかかわらず、フランス語法とフランスの影響に対する反対から、cultuur (“culture”)よりも kultuur が、Christus (“Christ”)よりも Kristus という綴りが選好された(de Rooji and Verhoeven 1988: 73)。他方、オランダ側は、<k>の文字がドイツ語を思い出させるため、<c>で始まる綴りのほうを好んだ(Coulmas 1989: 260)。

しかしながら、集団のアイデンティティと表記体系の関係は必ずしも単純ではない。事例をひとつ挙げておこう。

教祖ブリガム・ヤングに率いられ、迫害を逃れてユタ州に移住したモルモン教徒は、1850年代「デゼレット文字」(Deseret alphabet)と呼ばれる38文字からなる英語の新しい文字体系を創始した。この文字体系の究極的目的は、英語という共通語によって理想のモルモン共同体を樹立することであった。そのためには、効率的で非英語話者にも普遍的に理解可能な文字体系の創設が必須とされたのである(Thompson 1982: 46-48)。このことから明らかなように、デゼレット文字は、集団のアイデンティティや独自性を確立することを目的としたものではなかった。このことは、当時のニューヨークの週刊誌が「このデゼレット文字は他の文字を駆逐するであろう」と迫害の対象であるはずのモルモン教徒の成果を手放しで賞賛したこと(Thompson 1982: 46)からも窺えよう。しかし、デゼレット文字は、外部世界は言うに及ばず、モルモン教徒の中でも20年も経ないで無に帰した(Thompson 1982: 54)。

デゼレット文字の挫折は、この間に熱心な指導者を失ったことにもよる。しかし、

最も重要な理由は、新たな世代が、デゼレット文字を、英語を完璧にするという普遍的な営為としてではなく、モルモン教徒を英語世界から孤立させるための試みであると理解したことにある。新たな世代の指導者達は、米国と英語世界との統合をこそ望んだのであった。この文脈においてデゼレット文字は、啓蒙と進歩の象徴ではなく、旧世代の遺物と見なされたのである (Thompson 1982: 55)。

集団に固有の文字体系 (あるいは場合によっては言語) は、多くの場合集団のアイデンティティの象徴として、あるいは集団の独自性と統合の象徴として、意識的に推進される。しかし、デゼレット文字の運命からも明らかなように、独自の表記体系は、諸刃の剣である。それは逆に集団の孤立と隔絶の象徴としても機能しうるのである。

文字に代表される表記体系が集団の象徴として機能することは繰り返し述べた。しかし、これまで論じた例の多くは、民族、国民、国家といった言わば政治的集団であった。表記体系の選択に際して第一義的に重要な社会的要因は、政治と宗教であるというデイルの指摘 (Dale 1980: 12) を俟つまでもなく、表記体系は宗教集団にとっても重要な象徴である。以下、ドンガン語の例と同様宗教が表記体系の選択に決定的な意味を持つ事例をいくつか挙げておこう。

中世スペインはイスラム教徒支配の時代ではあったが、ムスリムとユダヤ人とキリスト教徒の共生 (Mann et al 1992) の時代でもあった。ユダヤ人達はそのほとんどが公用語であるアラビア語を話したが、彼らの生み出した多くのアラビア語文学はヘブライ文字で書かれた。1492年のレコンキスタ後、キリスト教支配が回復し、公用語がスペイン語になると、スペイン語を話すアラビア人たちは、アラビア文字で書かれたスペイン語文学を生み出した (Dale 1980: 11)。

東欧においては、ひとたび宗教が選択されると、その選択は使用する文字をキリル文字とラテン文字のどちらにするかを決定した (オーキー 1987: 5)。既に述べたカトリックのクロアチア語と正教のセルビア語もその例である。

事実、歴史的には、宗教言語の文字が、ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒の日常言語に採用された。例えば、カトリックのベロルシア人が自己の言語をラテン文字で表記する傾向があったのに対し、正教のベロルシア人はキリル文字を愛好した。ベロルシアのタタール人イスラム少数集団は、伝統的にはベロルシア語を

トルコ-アラビア文字で表記した (Wexler 1989: 145)。

今日における宗教と表記体系の関係の多様な事例を提供するのは、おそらくインドであろう。その典型を、デヴァナガリ文字で書かれるヒンディー語とアラビア文字で書かれるウルドゥー語の分化の過程 (Campbell 1991: 571, 1425, Schackel and Snell 1990: 7-11)に見ることができよう。この分化の過程では、ヒンディー語擁護派は、アラビア語、ペルシャ語起源の語彙を、サンスクリット起源のそれに置換し、ウルドゥー語擁護派は、サンスクリット起源の語彙をアラビア、ペルシャ系のそれに置換した (Mobbs 1981: 205)。と同時に、ヒンディー語はデヴァナガリ文字で表記され、ウルドゥー語はアラビア文字で表記された。これが視覚的にも両者の分離を促進したことは容易に理解できよう。

インドの場合、宗教と表記体系の密接な関わりを示す事例は枚挙に暇がない。

マラヤラム語を表記するのに、自らの經典の文字であるシリア文字を長く使用したと伝えられる南インドの沿岸部に定住したシリア人キリスト教徒 (Dale 1980: 10)、アラビア文字を使用するタミール語を話すタミール人ムスリム (Dale 1980: 10)、シンド語をアラビア文字で表記するシンド人ムスリム (Dale 1980: 10)、州政府が宗教に従ってペルシア-アラブ文字を使用する決心のように見えるカシミール語 (Mohan 1988: 81) 等々がそれである。中でも最もよく知られているのはパンジャブの事例であろう。

パンジャブ紛争は、近年、シク教徒とヒンドゥー教徒の紛争と化したのが、紛争の過程で言語特に表記体系が象徴として大きな意義を獲得した事例である。パンジャブ語は、パンジャブ人の大多数の宗教であるシク教の言語でもある。シク教の經典は、グルムキー文字によりパンジャブ語で書かれている。実際、パンジャブ州の公用語は、「グルムキー文字によって表わすパンジャブ語」と規定されている (Dale 1980: 10)。グルムキー文字で書かれたパンジャブ語が、シク教徒アイデンティティを象徴する (Dua 1996: 7) ののである。

6 表記体系と利害

前節では、表記体系の創設、置換、改定に伴う利害とアイデンティティという二つの側面のうち、アイデンティティの問題を中心に論じた。表記体系の全体あるい

は部分の選択が紛争の要因となるのは、それが集団のアイデンティティに関わるのみならず、直接的間接的に利害とも関わるからである。権力を、物質的非物質的価値の価値の配分における影響力と定義するならば、ここで言う利害は、権力と言い換えてもよい。

表記体系の創設と置換に関してこれまでに取り上げた事例は、ここでは敢えて繰り返さないが、支配的集団の側、非支配的集団の側のいずれにイニシアティブがあるかを問わず、誰が何をどのようにして獲得するのかという意味で物質的非物質的な利害の問題に直結するものであった。より具体的には、表記体系の創設と改変は、既存の利害関係あるいは権力関係を反映すると同時に、それを変更する。強国の間に置かれたアルバニア人やマケドニア人が自身の言語の統一的な固有の表記体系を有することは、民族の自決と独立につながるという意味でバルカンの政治状況の反映でもあると同時に、それに大きな変動をもたらすものでもある。チュルク系諸言語のラテン文字表記とキリル文字表記は、イスラム指導層の影響力と削ぐと同時に明らかにロシア化につながる意図をもったものであった。この意味で、表記体系の創造であれ、置換であれ、あるいは改変であれ、すべて社会的政治的なメッセージであり、それゆえに支持者と反対者の反応を生み出すのである (Fishman 1988: 1645)。それは、権力の行使と拡大、権力に対する抵抗、権力の確立をめぐる争い、一言にして言えば権力をめぐる争いでもある。

表記体系の創設と改変は集団間の利害関係ひいては権力関係を反映し変更するが、本稿では、これまで扱った多くの事例において、どちらかといえば既存の関係を変更する試みとして捉えてきた。ここでは、これを補う意味で、表記体系の創設と改変がむしろ既存の関係を反映する事例を二、三論じておく。この場合でも、表記体系創設と改変の試みが単に既存の関係を反映するのみならず、何らかの形で何程かはそれを変容する、例えば支配従属関係を強化し、他方でそれに対する抵抗を生み出す、ことは言うまでもない。

既に既存の表記体系が存在し、これを新たな表記体系に置換する試みは、文字のない社会への新たな表記体系の導入よりはるかに困難である。一般に既存の表記体系の維持に既得権益を有する層が既に存在するからである (Fishman 1988: 1648)。既に検討した旧ソ連におけるチュルク系諸言語の表記体系の置換、アタチュルクの

トルコ語表記のラテン文字体系によるペルシアーアラブ文字体系の置換、ソマリ語の表記体系の導入 (Lewis 1980: 216) などの例は、いずれも、十分な強制力をもつ政権の下で実施されている。このことは、表記体系の置換には、「明確で十分な強制力の行使」(Fishman 1988: 1646)が必要条件であることを示すものかもしれない。逆に言えば、既存の表記体系は、直ちに論証はできないが、それ程に特定の集団の利害と密接な関わりをもつことを示唆するとも言える。

表記体系の置換と改定のためにはおそらく強制力が必要条件であろう。しかし、強制力は決して十分条件ではない。北朝鮮におけるローマ字化の挫折 (Hannas 1995: 252-258) は、強権的体制の下でも置換が常に成功するとは限らないことを示す。強制力を伴わないとき、特に外生的な表記体系による内生的な表記体系の置換は、すべて失敗している。インドにおけるデヴァナガリ文字のローマ字による置換、日本のローマ字化運動、その他がその事例である。(Fishman 1988: 1646)

文字をもたない社会への新たな表記体系の導入は、利害関係、権力関係を伴うと否とに関わらず、大部分の場合外部の既存の表記体系に依存せざるを得ない。ここで取り上げるのは、このような外生的な表記体系の採用が外部社会との支配従属関係を反映しそれを強化する方向に働く事例である。

例えば、ナバジョ語 (Navajo) の最初の表記体系における母音の長さや声調の表示は、ナバジョ語を母語とする土着の人々のためであるよりは、むしろ外部の言語学者や教師の補助のためであった。ナバジョ語を母語とする人々にとっては、母音の長さや声調は文脈によって規定されており、そのための文字や記号が真に必要なわけではない。しかし、部外者にとっては、母音の長さや声調を示す複雑な表記法は、意味の正確な理解のためには必須であった (Fishman 1988: 1644) のである。同様に、西アフリカのティブ語 (Tiv) に関して、「声調が書き言葉から省略されれば、綴り字は一種の速記法になる。ティブ語の本格的な識字能力のためには、声調の習得が極めて重要である」という西欧の学者の見解に対して、ティブ語のテキストには、少数の例外を除き、声調の表記は要らない。声調の表記のないテキストを読むのに困難を感じるティブ人はいない (Jockers 1992: 153) という反論がなされている。ここでは、表記体系は外生的であるのみならず、母語話者のためにではなく、非母語話者、とりわけ西欧人のためのものである。導入された表記体系は、形態に

において他律的であるのみならず、機能においても他律的でありうるのである。

新たに導入される外生的な表記体系が、同一の表記体系によって表記される（通常は支配的な言語である）第二言語の識字能力の獲得を介して、支配的言語への交替、言語的同化に至る場合もある。旧ソ連におけるチュルク系諸言語の表記体系の置換がこれを意図したものであるとされたことは既に見たとおりである。他律的外生的な表記体系の導入は、言語的同化の一過程、一手段ともなりうるのである。例えば、ミュールホイスラー (Peter Mühlhäusler 1990: 190) は南太平洋の諸言語における外生的な表記体系の導入は、少数の例外を除き長期的には当該諸言語の衰退と消滅をもたらしたと論じる。この媒介となったのが、外生的な（一般には西欧の文字体系にもとづいた）表記体系による土着言語の識字能力であった。土着言語の識字能力は、支配的言語の識字能力を準備するからである。この意味で、外生的表記体系の導入は、言語的同化にまで至る「経過的」な表記体系でしかない (Mühlhäusler 1990: 203)。

外生的他律的な表記体系の導入は、単に言語的同化の一手段となるだけではない。それは、文化的イデオロギー的同化の手段ともなりうる。「宣教師も、植民地主義者も、[民族「問題」]人民委員も新たに導入された表記体系を、自分達の哲学的イデオロギー的なテキストを導入するのに利用した」 (Fishman 1988: 1644) のである。

7 文字紛争の現代性

本稿においては、これまで利害とアイデンティティというふたつの視点から表記体系をめぐる紛争、即ち文字紛争の事例を論じてきた。ここでは、紛争要因を近代社会の特性に探る。

近代以前の社会においては、表記体系の知識と技術を占有することは、前述のように支配の手段となりえた。しかしながら、19世紀以降の近代産業社会においては、表記体系の知識と技術、一言にして言えば識字能力を独占することは不可能になった。

近代産業社会は、市民の流動性、就中労働力の流動性を特徴とし、かつ必要とする社会である。この流動性が確保されるための条件のひとつは、多くの未知の人々とコミュニケーションを行う能力である。これを保証するのが社会における共通の

言語である。しかもコミュニケーションはしばしば対面する相手だけでなく時間と空間を隔てた不特定の他者で行う必要がある。これは、共通の書き言葉、そしてその前提となる共通の表記体系によつてのみ保証される。そして、この共通の言語と共通の書き言葉の習得を可能にするのが、普遍的な公教育制度である (Gellner 1983: 35)。産業社会は普遍的な、ないしはほとんど普遍的な読み書き能力を、実践する史上初めての社会である (Gellner 1993: 24)。この意味で、近代国民国家は、書物と識字能力と学校の産物である (Kaplinski 1993: 114)。

この近代産業社会の要請は、個人の立場からすれば、ゲルナー (Ernest Gellner) の言う高文化 (high culture) を身につけることの必要を意味する。高文化が意味するのは、読み書きにもとづいた文化である、つまりコンテクストから離れたメッセージを發し、そして理解することのできるような能力にもとづく文化である (Gellner 1993: 25)。これは、言語能力という観点からすれば、バーンステイン (Basil Bernstein) の言う精密コード (elaborate code) の文化に他ならない (Gellner 1983: 33)。精密コードとは、文脈に依存しない、普遍的に理解可能な、明示的な、まさに産業社会の要請する言語を生み出すが、限定コード (limited code) は文脈の理解がなければ理解できない文脈依存的で特殊な言語を生み出す (Bernstein 1972: 163-164)。

逆に国家の立場からすれば、国民的な高文化の確立が産業社会発展の必須の要件となる。そのためには、統一された共通の言語とその表記体系を教育を通じて普及することが緊急の政策となる。国内に多くの異言語、方言集団を抱える国家においては、統一的な言語と表記体系の確立がすべてに優先する緊急の政策課題である。文字紛争において、国家が当事者の一方となることが多いのはここに理由がある。

国家を未だにもたない、非支配的な集団にとつても問題は同様である。自民族を基礎とする近代国民国家と近代産業社会を樹立するためには、高文化の確立が不可欠だからである。彼らは、言語など支配集団と異なる文化的差異を基礎にして自身の高文化を創造したのである (Gellner 1993: 27)。フロフ (Miroslav Hroch 1985) が明らかにしたように、多くのナショナリズム運動が言語に関心を示し、時には言語ナショナリズムという言うべき側面を多かれ少なかれ有した理由もここに求められよう。

上述のゲルナーの議論は、確かに国家という枠組と経済的利害を協調しすぎるきらいがあり、アイデンティティという観点をより重視して均衡を図る必要がある（Pi-Sunyer 1985: 273）。この点に関しては言えば、本稿ではむしろアイデンティティの側面を強調しすぎたと言えるかもしれない。ともあれ、この難点は別として、ゲルナーの議論は、近代産業社会において、あるいは近代産業社会を目指す国家と社会において、なにゆえに表記体系が重要な意義を有するかについてひとつの有力な解答を与えるものである。近代産業社会が統一された均質な表記体系を必要とするからである。²⁾

それが複数の言語集団のいずれかにとって、自集団の利害とアイデンティティに密接に関わると認識されたとき文字紛争が発生する。

8 結び

本稿は多様な事例の分析を通じて、文字紛争とも言うべき表記体系の創設と改定をめぐる紛争が注目に値する研究対象として存在することを明らかにし、文字紛争に関して以下の如き結論、少なくとも検討に値する仮説を導き出した。

近代産業社会は、社会経済のナショナルな単位での組織化（所謂、国民経済あるいはナショナル・エコノミー）を要請する。このためには、民族あるいは国家という空間に共通の言語と労働力の空間的流動性を確保することが要請される。

近代社会における共通の言語は、しかも高文化、即ち書き言葉でもなくてはならない。近代産業社会は、社会生活において最低限の識字能力が必要とされる社会、ゲルナーの言葉を借りれば、少なくとも電話帳を読む能力が必要とされる社会だからである。近代社会における書き言葉のこの重要性は、近代社会における表記体系の重要性とほぼ同義である。蓋し、文字をもたぬ書き言葉は形容矛盾であろうから。

多言語社会、多方言社会においてはどの言語が、どの方言が共通語という特権的地位を獲得するかによって言語集団、方言集団のライフチャンスが多分に規定される。ここにおいて何語、何方言を話すか、話せるかが個人と集団の利害と関わる。近代社会あるいは近代への移行過程にある社会において言語紛争が頻発する契機の一つがある。しかも、書き言葉であることの要請は、表記体系の選択をめぐる紛争、文字紛争の重要性をいや増すものである。

これに加えて、言語と文字あるいは表記体系の関係は、必然的ではなく、任意的である。特定の言語と表記体系の関係は一対一には定まらない。しかも言語を特定することは、現実には不可能に近い。故に、任意の言語の表記体系の創設、全面的置換、部分的変更は原理的には常に可能である。換言すれば、表記体系に関しては常に政治的選択の可能性がある。ここに表記体系をめぐる紛争のひとつの存在論的要因を見ることができる。

言うまでもなく、表記体系の選択が紛争要因となるのは、それが集団のアイデンティティと利害（あるいは権力）と結びつく限りにおいてである。表記体系の選択が、集団の利害とアイデンティティの増大・強化と減少・衰退に関わる限りにおいてである。本稿では、事例の検討を通じて、表記体系あるいはその選択が集団のアイデンティティと利害に関わることは明らかにしたが、その関係の詳細の分析には至らなかった。この点は今後の課題である。

註

- 1) このことは、言語が当該集団にとって唯一の規定要因であることあるいは最も重要な規定要因であることを意味するとは限らない。また、実態においてそうであることも必ずしも意味しない。他方当該集団の大多数あるいは一部の構成員に、このように認識されている可能性を排除するものでもない。
- 2) 勿論15世紀李朝朝鮮における世宗によるハングルの創出と既存エリートの抵抗といった事例（Haarmann 1993: 147-153）もある。しかし、表記体系の問題を近代性によって理解する立場からは例外とも見えるこの事例においても、母語の表記を可能にすることにより民衆の知識水準を向上させるといふ、近代社会の要請に通ずる動機があったことも事実である（Haarmann 1993: 147, 149）。

引用文献

- Bernstein, Basil (1972) "Social Class, Language and Socialization," Pier Paolo Giglioli (ed.) (1972), *Language and Social Context: Selected Readings*, Harmondsworth: Penguin, 157-178. Reprinted from Bernstein (1970), *Class, Codes and Control vol.1: Theoretical Studies towards a Sociology of Language*, London, Routledge and Kegan Paul
- Bloomfield, Leonard (1969, 1933), *Language*, London: George Allen and Unwin

- Buck, Carl Darling (1916), "Language and the Sentiment of Nationality," *American Political Science Review*, 10(1), 44-69
- Byron, Janet L. (1976), *Selection among Alternates in Language Standardization: The Case of Albanian*, The Hague: Mouton
- Calvet, Louis-Jean (1998), *Language Wars and Linguistic Politics*, Oxford: Oxford University Press
- Campbell, Geroge L. (1991), *A Compendium of the World's Languages*, 2 vols., London: Routledge
- カレール=ダンコース, エレーヌ (1981), 『崩壊した帝国：ソ連における諸民族の反乱』, 東京：新評論
- Chaklader, Snehamoy (1990), *Sociolinguistics: A Guide to Language Problems in India*, New Delhi: Mittal
- Comrie, Bernard (1990) "Introduction", Bernard Comrie (ed.) (1990), *The Major Languages of Western Europe*, London: Routledge, 1-19
- Cooper, Robert L. (1991), "Dreams of Scripts: Writing Systems as Gifts of God," Robert L. Cooper and Bernard Spolsky (eds.) (1991), *The Influence of Language on Culture and Thought: Essays in Honor of Joshua A. Fishman's Sixty-Fifth Birthday*, Berlin: Mouton de Gruyter, 219-226
- Corbett, Greville (1990), "Serbo-Croat," Bernard Comrie (ed.) (1990), *The Major Languages of Eastern Europe*, London: Routledge, 125-143
- Coulmas, Florian (1984), "Linguistic Minorities and Literacy," Florian Coulmas (ed.) (1984), *Linguistic Minorities and Literacy: Language Policy Issues in Developing Countries*, The Hague: Mouton, 5-20
- Coulmas, Florian (1989), *The Writing Systems of the World*, Oxford: Basil Blackwell
- Dale, Ian R. H. (1980), "Digraphia," *International Journal of the Sociology of Language*, 26, 5-13
- de Rooji, Jaap and Gerard Verhoeven (1988), "Orthography Reform and Language Planning for Dutch," *International Journal of the Sociology of Language*, 73, 65-84
- Dua, Hans Raj (1996), "The Politics of Language Conflict: Implications for Language Planning and Political Theory," *Language Problems and Language Planning*, 20(1), 1-17
- Ermatinger, James (1992), "Ceausescu's Nationalism: Ancient Dacian Translated into Modern Romanian," Richard Frucht (ed.) (1992), *Labyrinth of Nationalism, Complexities of Diplomacy: Essays in Honor of Charles and Barbara Jelavich*, Columbus, Ohio: Slavica, 180-189
- Eyal, Jonathan (1990), "Moldavians," Graham Smith (ed.) (1990), *The Nationalities Question in the Soviet Union*, London: Longman, 123-141
- Fierman, William (1985), "Language Development in Soviet Uzbekistan," Kreindler (ed.) (1985), 205-233
- Fishman, Joshua A. (1988), "The Development and Reform of Writing System," Ulrich Ammon

- et al (eds.) (1988), *Sociolinguistics: An International Handbook of the Science of Language and Society*, Volume 2, Berlin: Walter de Gruyter, 1643-1650
- Fishman, Joshua A. (ed.) (1993), *The Earliest Stage of Language Planning: The "First Congress" Phenomenon*, Berlin: Mouton de Gruyter
- Friedman, Victor A. (1993), "The First Philological Conference for the Establishment of the Macedonian Alphabet and Macedonian Literary Language: Its Precedents and Consequences," Fishman (ed.) (1993), 159-180
- 福田邦夫 (1991) 「イスラームと民主主義 — アルジェリア社会主義の危機」, 『平和研究』, 16, 63-76
- Gellner, Ernest (1983), *Nations and Nationalism*, Oxford: Basil Blackwell
- ゲルナー, アーネスト(1993) 「今日のナショナリズム」, 『思想』, 1993年1月号, 19-33
- Goldthorpe, J. E. (1984), *The Sociology of the Third World: Disparity and Development*, 2nd ed., Cambridge: Cambridge University Press
- Haarmann, Harald (1990), "Elements of a Theory of Language Conflict," Peter Hans Nelde, (ed.) (1990), *Language Attitudes and Language Conflict (Plurilingua IX)*, Bonn: Dummler, 1-15
- Haarmann, Harald (1993), "The Emergence of the Korean Script as a Symbol of Korean Identity," Fishman. (ed.) (1993), 143-157
- Hannas, William C. (1995), "Korea's Attempt to Eliminate Chinese Characters and the Implication for Romanizing Chinese," *Language Problems and Language Planning*, 19(3), 250-270
- Harbsmeier, Michael (1989). "Writing and the Other: Travellers' Literacy, or Towards an Archaeology of Orality," Karen Schousboe and Mogens T. Larsen (eds.) (1989), *Literacy and Society*, Copenhagen: Akademisk Forlag, 197-228
- Haugen, Einar (1972, 1966), "Dialect, Language, Nation," Einar Haugen (ed. Anwar S. Dil) (1972), *The Ecology of Language: Essays by Einar Haugen*, Stanford: Stanford University Press, 237-254. Reprinted from *American Anthropologist* (1966), 68(6), 922-935
- Henderson, Tracy (1996), "Language and Identity in Galicia: The Current Orthographic Debate," Clare Mar-Molinero and Angel Smith (eds.) (1996), *Nationalism and National Identity in the Iberian Peninsula: Competing and Conflicting Identities*, Oxford: Berg, 237-251
- Hroch, Miroslav (1985), *Social Precondition of National Revival in Europe. A Comparative Analysis of the Social Composition of Patriotic Groups among the Smaller European Nations*, Cambridge: Cambridge University Press
- Isaievych, Iaroslav (1994), "Galicia and Problems of National Identity," Ritchie Robertson and Edward Timms (eds.) (1994), *The Habsburg Legacy: National Identity in Historical Perspective*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 37-45
- Jockers, Heintz (1992), "The Alphabetization of the Tiv: A Case Study," Norbert Cyffer et al (eds.) (1991), *Language Standardization in Africa*, Hamburg: Helmut Buske, 145-156

- Kaplinski, Jaan (1993), "The Future of National Cultures in Europe," Jyrki Livonen (ed.) (1993), *The Future of the Nation-State in Europe*, Aldershot: Edward Elgar, 107-116
- Kawano, Noriyuki and Masatsugu Matsuo (2000), *Language of Politics or Politics of Language? Toward an Integrated Perspective* (IDEC Research Paper 2000-1), Higashi-hiroshima: Graduate School of International Development and Cooperation, Hiroshima University
- Keyes, Charles F. (1995), "Who Are the Tai? Reflections on the Invention of Identities," Lola Romanucci-Ross and George De Vos (eds.) (1995), *Ethnic Identity: Creation, Conflict and Accommodation*, 3rd ed., Walnut Creek, CA: AltaMira Press, 136-159
- Kreindler, Isabelle T.(ed.) (1985), *Sociolinguistic Perspectives on Soviet National Languages: Their Past, Present and Future*, Berlin: Mouton de Gruyter
- Krouglov, Alexander (1997), "Ukrainian - Reconstituting a Language," Michael Clyne (ed.) (1997), *Undoing and Redoing Corpus Planning*, Berlin: Mouton de Gruyter, 11-30
- Lazzerini, Edward (1985), "Crimean Tatar: The Fate of a Severed Tongue," Kreindler (ed.) (1985), 109-124
- Lewis, Ioan M. (1980), *A Modern History of Somalia: Nation and State in the Horn of Africa*, revised ed., London: Longman
- Mallinson, Graham (1990), "Romanian," Bernard Comrie (ed.) (1990), *The Major Languages of Western Europe*, London: Routledge, 293-311
- Mann, Vivian B. et al (eds.) (1992), *Convivencia: Jews, Muslims, and Christians in Medieval Spain*, New York: George Braziller
- Mezei, Regina (1989), "Somali Language and Literacy," *Language Problems and Language Planning*, 13(3), 211-223
- Miranda, Rocky V. (1992), "Language Standardization in Progress: The Case of Konkani," Edward C. Dimock, Jr. et al (eds.) (1992), *Dimensions of Sociolinguistics in South Asia: Papers in Memory of Gerald B. Kelley*, New Delhi: Oxford University Press and IBH Publishing, 213-221
- 宮治一雄 (1978) 『世界現代史 1 7 アフリカ現代史 V』, 東京: 山川出版社
- Mobbs, Michael C. (1981), "Two Languages or One? The Significance of the Language Names 'Hindi' and 'Urdu,'" *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 2(3), 203-211
- Mohan, Rakesh (1988), "Language Planning and Language Conflict: The Case of Kashmiri," *International Journal of the Sociology of Language*, 75, 73-85
- Mühlhäusler, Peter (1990), "'Reducing' Pacific Languages to Writings," John Earle Joseph and Talbot J. Taylor (eds.) (1990), *Ideologies of Language*, London: Routledge, 189-205
- Musa, Monsur (1996), "Politics of Language Planning in Pakistan and the Birth of a New State," *International Journal of the Sociology of Language*, 118, 63-80
- 中井和夫 (1988) 『ソヴェト民族政策史: ウクライナ 1917-1945』, 東京: お茶の水書房
- 中井和夫 (1990) 『ウクライナ - 静かな弟?』, 山内昌之他 (1990) 『分裂するソ連: なぜ民族の反乱が起こったか』, 東京: 日本放送出版協会, 72-112

- 中井和夫 (1991) 「ソ連邦とウクライナ」, 高田和夫 (編) (1991) 『ペレストロイカとソ連・東欧圏の歴史と現在』, 福岡:九州大学出版会、243-257
- オーキー, R (Robin Okey) (1987) 『東欧現代史』, 東京: 勁草書房
- Olcott, Martha Brill (1985), "The Politics of Language Reform in Kazakhstan," Kreindler (ed.) (1985), 183-204
- Pi-sunyer, Oriol (1985), "Catalan Nationalism: Some Theoretical and Historical Considerations," Edward A. Tiryakian, Edward A. and Ronald Rogowski (eds.) (1985), *New Nationalisms of the Developed West: Toward Explanation*, Boston: Allen and Unwin, 254-276
- Rogers, Kenneth H. (1981), "Studies on Linguistic Nationalism in the Romance Languages," Rebecca Posner and John W. Green (eds.) (1981), *Trends in Romance Linguistics and Philology, vol.2 Synchronic Linguistics*, The Hague: Mouton, 228-256
- Saussure, Ferdinand de (tr. by Roy Harris) (1983, 1972), *Course in General Linguistics*, London: Duckworth
- Schieffelin, Bambi B. and Rachele Charlier Doucet (1998), "The 'Real' Haitian Creole: Ideology, Metalinguistics, and Orthographic Choice," Bambi B. Schieffelin et al (eds.) (1998), *Language Ideologies: Practice and Theory*, New York: Oxford University Press, 285-316. Reprinted from *American Ethnologist*, 21(1) (1994)
- Shackle, Christopher and Rupert Snell (1990), *Hindi and Urdu since 1800: A Common Reader*, London: School of Oriental and African Studies, University of London
- Singh, K. S. and S. Manoharan (1993), *Languages and Scripts (People of India Vol. 9)*, Delhi: Oxford University Press
- Smith, Graham (1989), "Administering Ethnoregional Stability: The Soviet State and the Nationalities Question," Colin H. Williams and Eleonore Kofman (eds.) (1989), *Community Conflict, Partition and Nationalism*, London: Routledge, 224-251
- Solchanyk, Roman (1985), "Language Politics in the Ukraine," Kreindler (ed.) (1985), 57-105
- Subtelny, Orest (1988), *Ukraine: A History*, Toronto: University of Toronto Press
- Thierry, Francois (1989), "Empire and Minority in China," Gerard Chaliand (ed.) (1989), *Minority Peoples in the Age of Nation-States*, London: Pluto Press, 76-99
- Thompson, Roger M. (1982), "Language Planning in Frontier America: The Case of Deseret Alphabet," *Language Problems and Language Planning*, 6(2), 45-62
- Trix, Frances (1997), "Alphabet Conflict in the Balkans: Albanian and the Congress of Monastir," *International Journal of the Sociology of Language*, 128, 1-23
- van de Craen, Pete and Roland Willemyns (1988), "The Standardization of Dutch in Flanders," *International Journal of the Sociology of Language*, 73, 45-64
- Wexler, Paul (1989), "Hieratic Components in Soviet Dictionaries of Yiddish, Dungan, and Belorussian," Bjorn H. Jernudd and Michael J. Shapiro (eds.) (1989), *The Politics of Language Purism*, Berlin: Mouton de Gruyter, 141-167
- 山川力 (1989) 『政治とアイヌ民族』, 東京: 未来社